

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	<p>William Ludwell Quint Oga-Baldwin (ウィリアム・ラトウエル・クイント・オオガ・ホールトウイン)</p>
2. 審査委員	<p>主査：(兵庫教育大学准教授) 中田賀之 副主査：(鳴門教育大学教授) 伊東治己 委員：(上越教育大学教授) 大場浩正 委員：(兵庫教育大学教授) 吉田達弘 委員：(兵庫教育大学准教授) 中間玲子</p>
<p>3. 論文題目 Student engagement and motivation in primary foreign language classes: A mixed-methods longitudinal study (小学校外国語活動における児童の主体的な学びと動機づけに関する混合方法を用いた###縦断的研究)</p>	
<p>4. 審査結果の要旨</p> <p>教科教育実践学専攻言語系教育連合講座 William Ludwell Quint Oga-Baldwinから申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>日時：平成27年2月1日(日) 13時～14時20分 場所：連合大学院大阪サテライト 401室</p> <p>(1). 学位論文の構成と概要</p> <p>(構成)</p> <p>第一章 本研究の目的と方法 第二章 学校教育における動機づけ理論と実践 第三章 日本の小学校外国語教育政策 第四章 研究手法 第五章 小学校外国語活動における児童の言語使用についての研究 第六章 予備調査 第七章 小学校外国語活動における教師の言語使用についての研究 第八章 教師が児童の学習と動機づけに与える影響に関する縦断的・量的研究 第九章 教師が児童の学習と動機づけに与える影響に関する観察手法を用いた質的研究 第十章 結論 総合的な考察と今後の課題</p> <p>(概要)</p> <p>第1章では、小学校外国語活動における担任の教師が十分に準備できていない現状を詳しく分析し、日本の小学校外国語活動が抱える問題点を指摘している。第2章では、engagementや動機づけに関する理論を概観している。特に、自己決定意志理論と社会認知理論に焦点をあてつつ、学校環境において動機づけと学習を促進するためのメカニズムを論じる際の理論的基盤を提供している。第3章では、前章で述べた自己決定意思論の観点から、日本の小学校外国語教育をとりまく社会文化的側面や外国語教育政策、特に小学校外国語活動における外国人教師(ALT)の役割について論じている。</p>	

第4章では、ミックス法を用いた研究デザインを概観している。前章までの理論的基盤に基づき設定された研究課題は3つである。第一は、構造化された授業は児童の外国語学習に対するengagementにどのような影響があるか。第二は、構造化された授業は児童の動機づけと学習へのengagementにどのような影響があるか。第三は、高度に構造化された授業と低度に構造化されている授業では、児童の学習へのengagementの度合いにどのような違いがあるか。これらの研究目的に対して、使用されたミックス法の内容の詳細を説明し、複雑な動機づけの概念を捉えるためにその内容が妥当性であることを説明している。

第5章では、ほぼ100%近く外国語のみを用いて授業を行っている日本とアメリカの小学校の授業を対象に、いかに教師が児童のengagementを支援しているかを検証した。データ分析から、これらの教師はごくわずかであるが母語をうまく使いつつ、心地よい外国語による教室環境を創出することに成功していることが示された。

第6章では、外国語学習動機の発達過程の縦断的モデルを検証するための尺度作成を目的とした、質的および量的手法による予備調査である。データからは、教室にける教師の行動が彼らの満足感やengagementに与える影響についての児童の認識が明瞭かつ一貫していることが明らかとなった。

第7章では、児童の担任の教師による授業とALTによる授業に対する認識の差異、特にnative speakerによる授業がより児童の英語コミュニケーション能力を促進するものかどうかを検証している。児童は日本人教師による授業と外国人教師による授業との差異はあまり認識しておらず、日本人教師による授業においてより活発に発言していることが報告されている。

第8章では、児童によるアンケート結果と児童の教室での行動についての観察を通して、小学校5年生の外国語学習への変化を長期的に追跡している。児童の動機づけ以上に授業の手続きや構造が彼らの学習へのengagementにより大きな影響を与えていることが外部観察者および教師のデータから裏付けられた。

第9章では、児童が様々な授業に対して意欲が高まったり、楽しいと感じたりする要因と過程を検証するため、教室における生徒のインタラクションをミクロ・マクロの視点で質的に分析している。構造化の程度が低い授業においては、むしろ定期的に暗記やパターン・プラクティスが頻繁に用いられており、教師の英語力の程度が低いものであることが明らかとなる一方、生徒が外国語学習を楽しみ感じその過程から学ぶことのできる環境は、情意的サポート、指示におけるサポート、明瞭な授業構造、および理解できる言語インプットなどが与えられていることであると、示唆された。

第10章において、本研究をまとめ、教授における示唆をした上で、研究の限界と問題点、さらに今後の研究への課題に言及し結論とした。

(2). 審査経過

本研究は、上述の研究課題に答えるため長期間にわたり児童の小学校外国語活動への動機づけとengagementについて研究した縦断的研究である。分析手法としては、収集された生徒および教師からの複数のデータを、量的アプローチ(分散分析, 共分散構造分析等)および質的アプローチ(グラウンデッド・セオリーおよび談話分析)を組み合わせた混合手法を用いており、研究目的に対して概ね妥当な手続きにより分析が行われていることが確認された。

本論文の独創性は、Deci & Ryanの自己決定意志論の枠組みに基づきつつも、学校教育という観点からReeveの認知評価理論やBrophyの学習動機づけという概念を包括的に融合させ、小学校外国語活動における動機づけとengagementを論じている点にある。特に、日本のように外国語として英語を学ぶ学校教育環境において、学習者のオートノミーの促進を支援する重要な要因として構造化された授業(教室風土)があることに着目した点は、今後の小学校の外国活動における児童の学習意欲を考える上で、重要な一石を投じるものであると審査委員に高く評価された。

審査委員会では、本研究が綿密に計画された長期的な大規模な研究であり独創性に関しても高い評価を受ける一方で、博士論文全体としては、多くの実験や調査の一部には必ずしも一つの論文としてうまく適合されていないこと、とりわけ外国語活動を観察した研究が全体の中で必ずしもうまく位置づけられていない、観察による評価と児童の評定と関係について言及されていないことなどが指摘されたが、これらは、今後の研究の発展に資する助言として認識された。

(3). 審査結果

以上により、本審査委員会は William Ludwell Quint Oga-Baldwin の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。